



獺祭

篠田純子

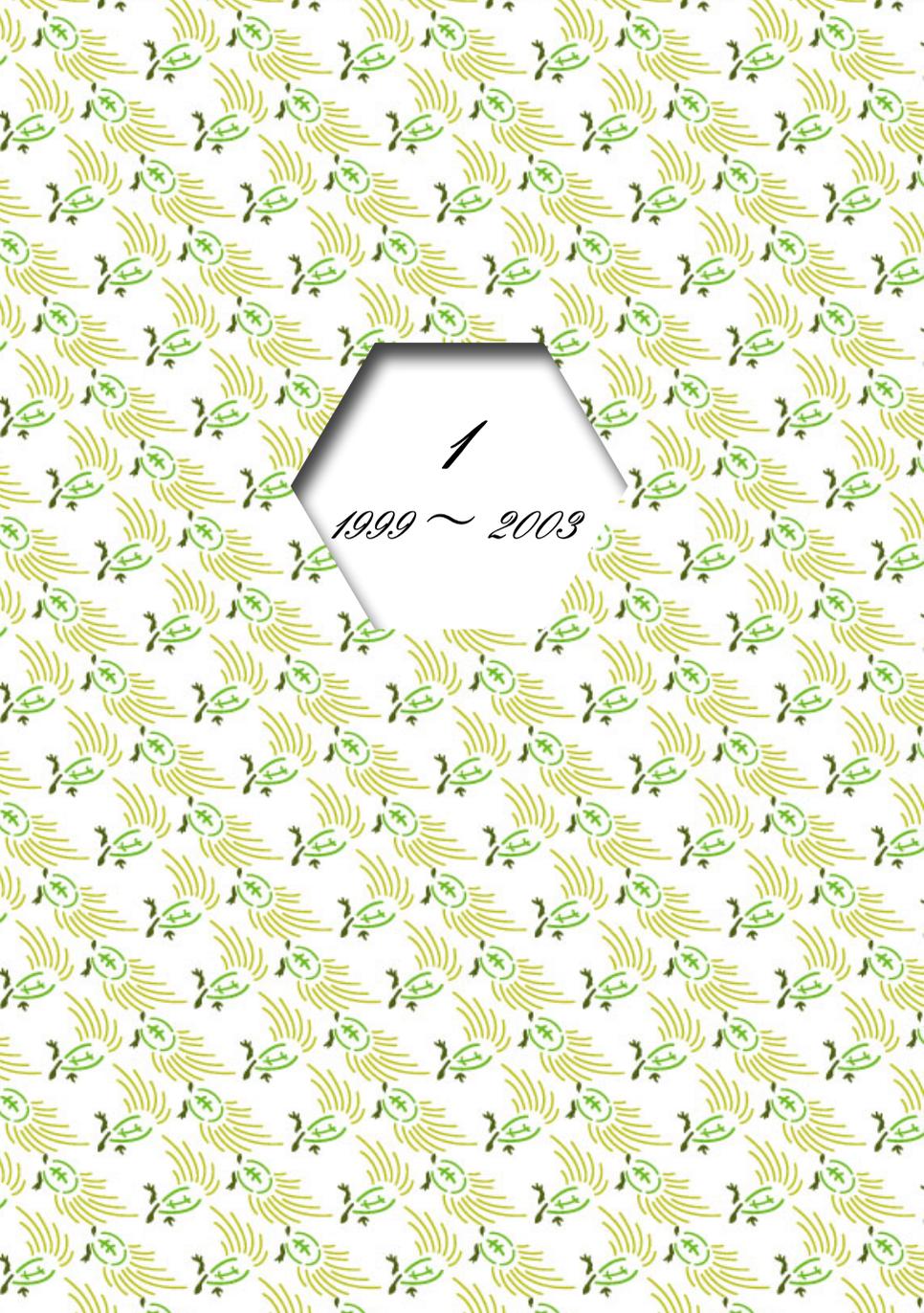


獺祭

篠田純子

あを創刊十周年記念句集

限定十部



1
1999 ~ 2003

討ち死にの昼の畳の暑さかな



落蟬に思ひ遂げしか問ふてゐる



下町に早稲を実らす米屋かな

少年の言葉のナイフ月凍る



春暁に産み落とされしわが卵子

三月の乙女の乳房つんと立ち



大気汚染うすきガス室苜蓿

山の息吹きかけらるる野分かな



四肢五臓六腑九竅昼寝かな

ひとでの死ゆふべ落ちたる流れ星



梅雨の寺竹の精霊憑る気配

投げつける鼠花火の間合ひかな



突っ掛ける鼻緒もどかし祭笛

肥満児の梯子くぐりや運動会



デートリツヒの靴に踏まるる落葉かな

マドラーをすつとグラスへ雪女



往來の喧嘩見てゐる十二月

木枯やしがつきたい時もある



こん畜生研残せし大噓

吸ふ息の継げなき程に初笑ひ



ぬめらりと甲冑黒し今年竹

田舎家に闇の大きく夏蛙



恋すてふ山椒魚の眼かな

母の日の母の乳房に娘の触るる



雪しまく文楽人形素足なる

早々と蚊帳の吊られし妻の実家



夕立晴魔女は箒を干しみたり

貝
繋ぐ少女の髪や星今宵



ス
トーカー色なき風に振り向き

月の酒半跣思惟のポーズして



つづれさせひと匙づつの看取かな

除夜まうで心は母にしなだれて



やつちや場の裸電球で暖を取る

引き籠もる人にも来たり花粉症



浜松町小便小僧冬帽子

人おぼろ 霊長類とプランクトン



コンドームの宣伝のバス青葉風

福祉課に咆哮ひびき梅雨寒し



放浪癖帰巢本能めだかの子

夜濯や少年の香のただならぬ



過勞死などあり得ぬ男生ビール

藍色の地球の底で平泳ぎ



いつの世も左まはりに踊りの輪

流れ着くハングル文字のラムネ瓶



落蟬の喰はれて風になびくかな

神
棚
に
餅
花
踏
台
が
無
い



衿を立て五感をつんと研ぎ澄ます

白壁に譚妄の見ゆ冬鴉



目の前の悪魔小悪魔豆をまく

A
B
型
の
B
が
飛
び
出
た
豆
の
飯



葭
焼
の
戦
火
に
見
ゆ
る
目
眩
か
な

少年薄暑百済観音めくうなじ



夏近し早熟少女ひた走る

父の日や父の中なるピーターパン



ソーダー水縦にせり出すリーゼント

剣
劇
の
カ
ク
テ
ル
光
線
夏
休



知
り
合
っ
た
ば
か
り
の
頃
の
蛇
苺

嘘
つ
き
の
俳
人
の
黙
秋
櫻



か
は
た
れ
時
も
ん
ど
り
打
つ
て
跳
ぶ
金
魚

納涼船女装集団妖怪編



末っ子の長老となる魂祭

不条理も条理と思へ銀杏の実



手をつなぐ夫サルトル似木の葉髪

草の花劣性遺伝を確信す



死に際に乳飲む仕草夕月夜

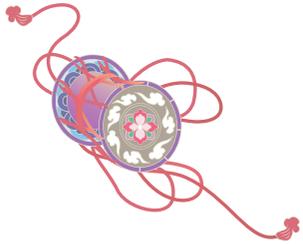


2

2004 ~ 2006

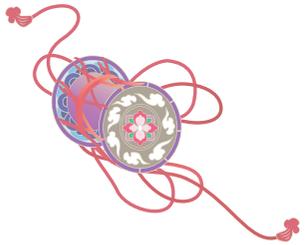
鳥瓜五パーセントの夫婦愛

今生をくわつと見据ゑ寒鴉



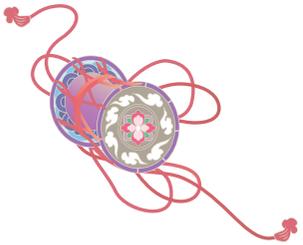
憎みつつ愛することあり大根煮る

霜柱老化しながら進化する



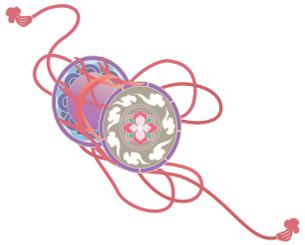
龍の玉死ねと言はれて死にますか

薄氷といふ天井のある世界



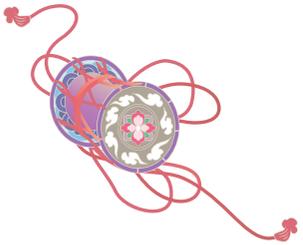
六区正月永井荷風に似たる人

計算のされた後れ毛雪女郎



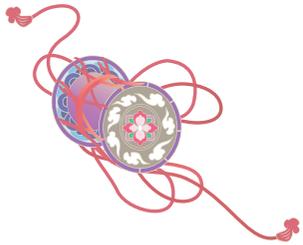
生きものに鬱は不可欠寒卵

哀しくてやさしきひかり蠅生る



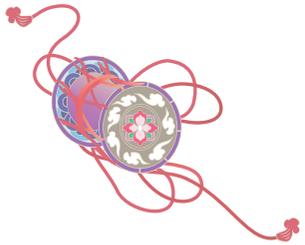
ハイヤー待たせ婚姻届春灯

傘ささず少年帰る春灯



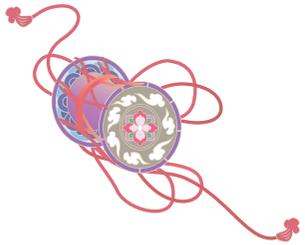
サプリメントといふ配合飼料春の風邪

予報士の満面の笑み桜さく



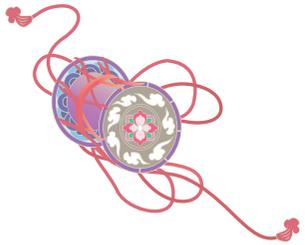
青
ざ
め
て
癩
症
の
子
の
入
学
す

青
葡
萄
娘
は
家
を
出
る
と
云
ふ



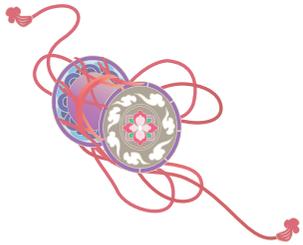
花の下ホームレスさんと長ばなし

女衞めく日本語教師柳絮とぶ



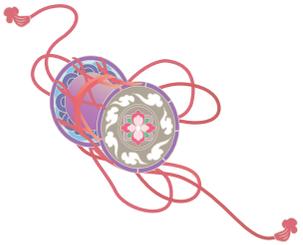
面接のソファーフカフカ花曇

芋殻折る口惜しさはほぼ諦めに



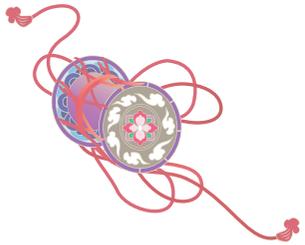
見ず知らずに挨拶される梅雨晴間

鳳仙花ずっと死ぬまで反抗期



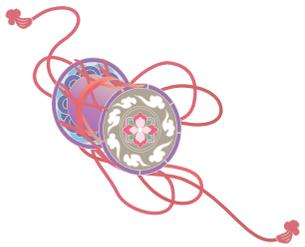
死にはじめて無までの時間蟻運ぶ

あらがはず上昇気流へ秋の蝶



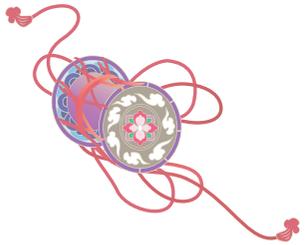
酔芙蓉髪の豊かに老にけり

母の物捨て去りしより昼の虫



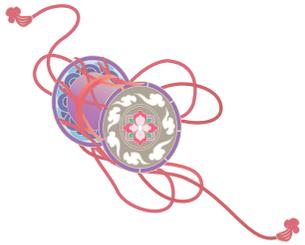
合歡の花殺し文句にころされる

呼び止めて走り乗るバス秋暑し



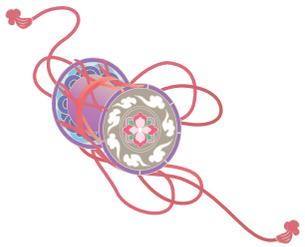
久々の空中浮遊金木犀

どんみりと雑木林の冬ぬくし



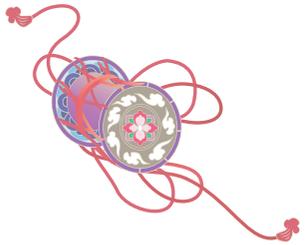
柿襖
なかなか
女が止み
ません

金木犀
三角形の
図書館へ



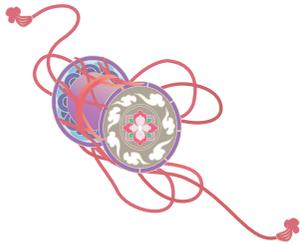
水琴窟のやうな水漏れ冬に入る

蜘蛛の巣を逆光に見る十二月



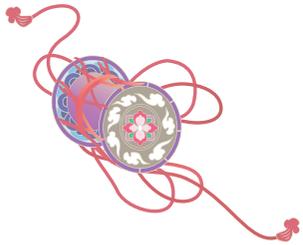
美しく腹を減らせる鷹野かな

鷹匠の眼光既に野性なり



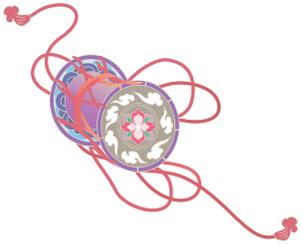
隼のスイッチ入る急降下

綿虫や母は帰郷を果せずに



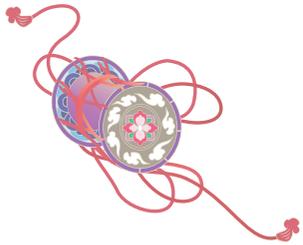
囑託の身分更新ビル風

竜の玉笑つて死ねる筈がない



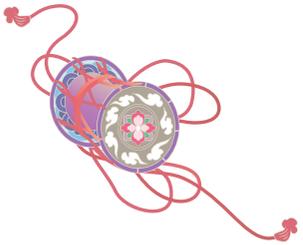
博打ならまだ勝目あり三の酉

祖父までが土葬の村の雪ばんば



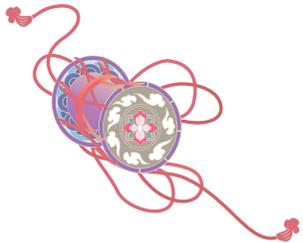
大試験 五本の指で顔覆ふ

もらひ笑ひの湧きて卒業写真かな



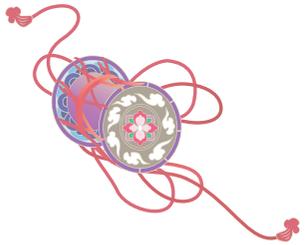
私
だ
け
時
間
の
と
ま
る
初
寝
鏡

寝
返
り
の
嘴
差
し
替
へ
て
浮
寝
鴨



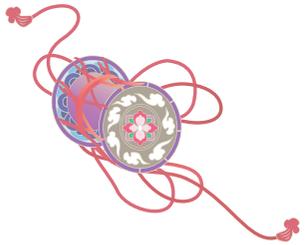
在郷の伯母大雪は切ねエてエ

いつだって我慢する癖あめんぼう



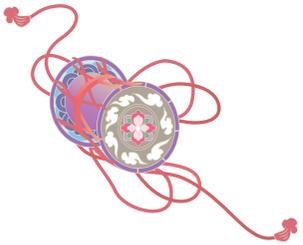
春雷や一瞬醒める認知症

外階段で待つマロニエの花の夜



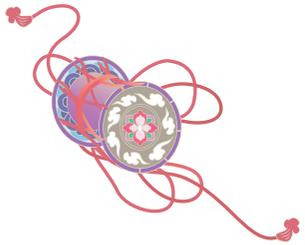
ハンカチの木がしゃべり出す五月かな

小夜更けて垂れ桜の泣きじやくる



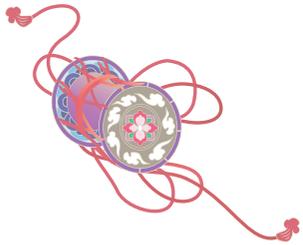
幼稚園なんてキライでいちご好き

片陰や住んでいたまち他所の町



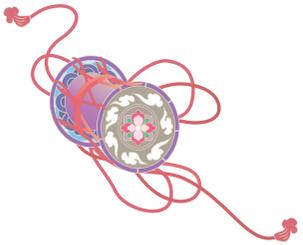
白鷺の五羽居てそれも関らず

あをさぎの夜は念仏をききにくる



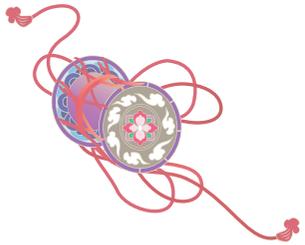
ぷつと踏むうれしくて踏むさくらの実

秋高しおびんづる様の膝がしら



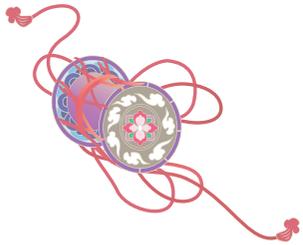
ひととひとは櫛にからまる素風かな

唐辛子優しい眉に描き直す



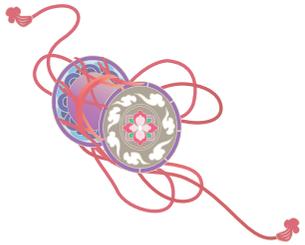
龍舌蘭の花と炎帝吠えあへり

秋暑し飲み屋のドアに蹴りのあと



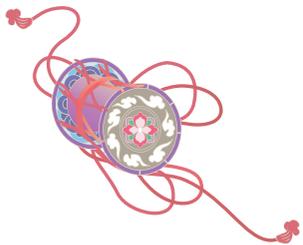
ガラパゴスのイグアナめきて昼寝覚

しろもの房ぼんと昼へ夜の秋



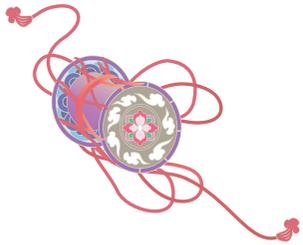
金持になつたらさーあところろ天

震災忌あのカンバンを撤去せよ



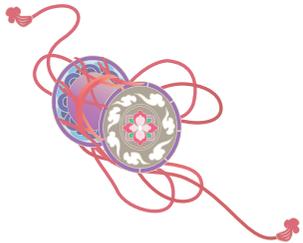
ゆんらりと神武天皇山車の発つ

銀座のシェフにまんまと兎喰はされる



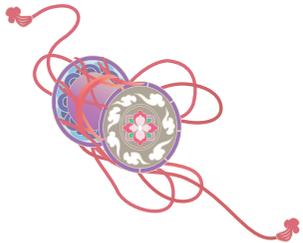
疣
筆
り
純
粋
だ
か
ら
殴
ら
れ
る

折
れ
曲
る
や
う
に
労
り
あ
ふ
夜
寒



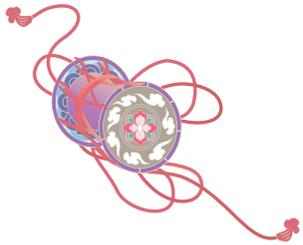
妹のやうな娘と濁酒

盗賊の女房のやう着膨れり



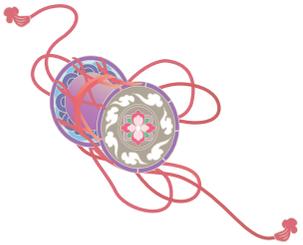
地下鉄のけんくわんわんわん十二月

腹に脂肪たまらぬ努力三島の忌



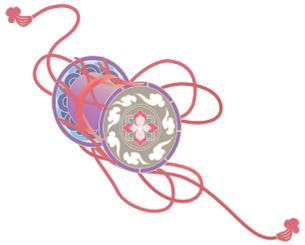
十一月の鯛焼のひれ燃えてゐる

木の葉散るペットショップの犬猫背



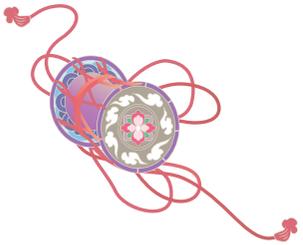
十二月人の転がる交叉点

ふはふはの物ばかり食べ春のかぜ



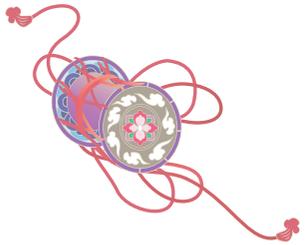
寒猫の屋根の上から降る佃

クロマニオンピテカントロプス姫始



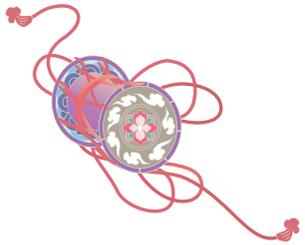
絵
す
ご
ろ
く
百
パ
ー
セ
ン
ト
人
は
死
ぬ

エ
ン
ジ
ン
の
か
か
ら
ぬ
小
舟
春
浅
し



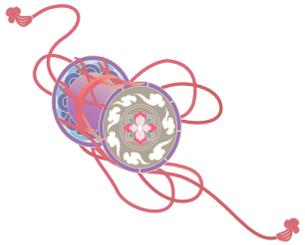
露の臺淋しがりやで人嫌ひ

傷だらけの猿山のボス陽炎へり



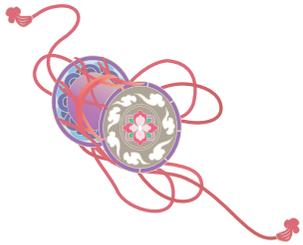
観音の後背のずれ桜かな

いい一生だつたと思ふ寒鴉もゐるだらう



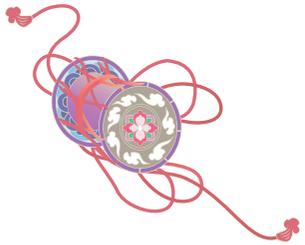
風信子母が異様になつていく

イーグルのタトウの男青葉風



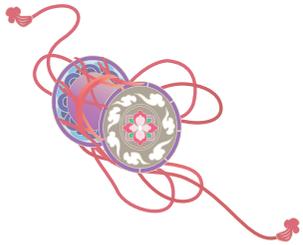
ハナハトマメマス前頭葉隴

三人のサリーの女桐の花



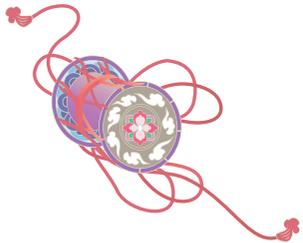
両肌を脱ぎ子に乳房選ばせる

ねむの花の下で人待つねむの風



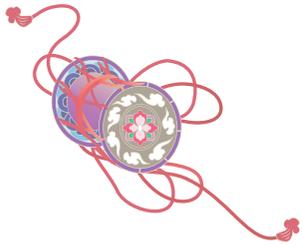
香水をうかつにつけて寝つかれず

本物がだんだん解るソーダー水



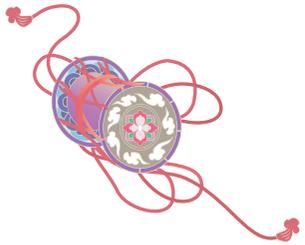
ビルは樹に樹はビルに添ふ炎暑かな

サイレントの台本語りは始める暑さかな



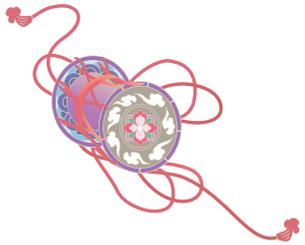
北大路魯山人なる皿涼し

曾祖父母祖父母父母零余子飯



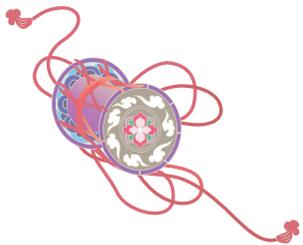
みつつよつ指輪をはめてプレスリー忌

稲穂越し垂仁天皇御陵かな



吉右衛門の鬼平が好き落花生

両の手で白湯飲み干せり秋の風





手のどこの切れたる血やら年の暮

飴を切る音の裏間に咳をする

肋骨に
取り切
れない
春が来
た



百萬円
の熊手
の裏を
覗きけ
り

筋肉も脂肪も削げて水馬



にんげんに番号のあり獺祭

春愁や乳房を挟むマンモグラフィー



間違ひを起こして了ふ田螺かな

花嫁の荷を出し
広間おぼろかな



シェーカーに8の残像
春の宵

夕涼み昔の顔の根津の猫



青嵐身の丈五尺二寸五分

CD
に
友
の
指
あ
と
秋
薨
雨



濃
紫
陽
花
胡
弓
に
咏
へ
し
も
の
溢
れ

シスター二人乗り込んでくる秋の蝶



根津の夜みこしみてゐる談志見る

川床や足を浸して少女めく



原爆忌アインシュタインが悪いのか

永年勤続毛玉の浮きしカーディガン



胎動に大輪の笑み赤とんぼ

地虫鳴くサービスタイムのラブホテル



ピラカンサきのふの夜のヒステリー

ケイタイを落して了ふ春の泥



雌猫はやさしく咬まれ冬の月

冬の草干しっ放しのシャツ一枚



突然にボス猿叫び冴返る

春
燈
力
一
杯
乳
せ
せ
る

折
り
合
っ
て
静
か
に
暮
す
春
燈



しらふではやってられない雪をんな



産室に蠢けるもの冬ぬくし

東京タワーが高かった頃さくらんぼ



最上部で軋む薄暑の観覧車

冷たさの肺に残れりみどりの夜



新樹光法務省より僧侶出づ

二日ほど盆唄
棲めり後頭部

汐入の堀の匂ひ
や朝曇



藍の香の立つや祭の小競りあひ



生身魂慌ててズボン穿きにけり

自
転
車
の
踵
を
返
す
日
雷



老
衰
は
楽
さ
う
に
見
ゆ
窓
に
月

つづれさせひと匙づつの看取りかな



生身魂曾孫としばし見詰めあふ

生身魂慌ててズボン穿きにけり



本買ふか飯を食はうか昼の蝨斯

冬の
鴉母の
楽しみ
我楽し
み



メー
ル打
つ隙
なき
仕草
冬の
駅

初紅葉ピカソの描く普通の絵



石路の花言ひたきことが母の眼に

か
は
た
れ
時
生^{なま}
身
の
う
ち
は
寒
の
紅

花
終
脳
の
隙
間
に
咲
い
て
ゐ
る



寒稽古時の隙間に打ち込み



セーターを着せられ水子地藏かな

初芝居露見まぢかの美人局



おぼろ月コンクリートの
中に住む

手づくりのスカート
今日の花衣



柳の芽切り取り線は
こちらです

春深し 困った顔の フラメンコ



さりながら 恋女房の花粉症

指
そ
れ
ぞ
れ
仏
に
見
ゆ
る
穀
雨
か
な



下
町
に
下
水
の
匂
ひ
蛇
い
ち
ご

水
琴
窟
に
永
く
遊
び
て
藪
蚊
か
な



青
葉
風
腹
か
ら
歩
む
相
撲
取

櫻桃忌魔法の効かぬ魔法瓶



止って遊ぶマンバウの目の愁ひ

とうさんのそのまたとうさんの豆の飯



他所の子も叱る佃の盆をどり

盆唄や佃の井戸に塩の味



海の日を電気をつくる羽根やさし

秋の空母は硝子の目となりぬ



秋暑し児を裏返す掌

白衣の女医に涼しき胸を触れらるる



白シャツと眼鏡
浅沼稻次郎

秋風の吹き抜けてゆく身柱元



孫生れて夫若返る赤とんぼ

洋梨にヴェーナスの線ありにけり

野良猫にをぢさん抱かれ昼の虫



防空壕に時空混ざるや冬ぬくし



年末に皆死んでいく大河ドラマ

幼
児
の
手
旗
信
号
初
笑

ひ
と
つ
蒲
団
ち
ひ
さ
き
足
に
蹴
ら
れ
け
り



愛
宕
山
に
天
皇
の
声
初
詣



親
し
め
り
心
波
打
つ
日
の
冬
芽

瀬
祭



終



をそまつり
瀬 祭

著者 篠田純子

発行日 2010年11月13日

発行人 佐藤喜孝

装丁 佐藤喜孝

発行所 竹僊房

製本所 花岡製本所

二〇〇一年創刊の「あを」は来年で十周年を迎へます。「九邀」の詩のやうに「花を藝ひゑて以て蝶を邀ひふべし。書を藏して以て友を邀ひふべし。徳を積みて以て天を邀ひふべし。」ではありませんが、正に良友を邀へるべき俳句を作る、これが「あを」の二つの目標です。そのころを形に表したのがこの「限定一部」の句集です。

この句集はあを編集部のデータベースにある『あを』『飛行船』『獐』句会・吟行等のデータより作家各人が二百五十句抄出し発表年代順に一本にまとめたものです。句集名は喜孝が興の赴くまま付けさせていただきました。

二〇一〇年十一月八日

佐藤喜孝